

# 紅い扱帶

野村胡堂

—

小綱町二丁目の袋物問屋丸屋六兵衛は、とうとう嫁のお絹を追い出した上、  
伴の染五郎を土蔵の二階に閉じ籠めてしましました。

理由はいろいろありますが、その第一番に挙げられるのは、染五郎は跡取には相違ないにしても、六兵衛のほんとうの子ではなく、藁の上から引取つた甥で、情愛の上にいくらか袴を着たものがあり、第二番の直接原因は、お絹の里が商売の手違いから去年の暮を越し兼ねてているのを見て、ツイ父親に内証で五百両という大金を染五郎の一存で融通したことなどが知れたためだと言われております。

しかし、もつともつと突込んだ本当の原因というのは、染五郎とお絹の仲が良過ぎて、ツイ舅の六兵衛の存在を忘れ、五十になつたばかりの独り者の六兵衛は、筋違いの嫉妬<sup>しつと</sup>と、無視された老人らしい忿怒のやり場に、若い二人の間を割いたとも取沙汰されました。

丸屋六兵衛のしたことは、その頃の社会通念から言えば、一々尤もで、公事師が束でかかつても、批弁の持込みようはありません。お絹は染五郎との仲を割かれ、泣く泣く新茅場町の里方へ帰り、染五郎は小網町二丁目の河岸つ縁に建てた、丸屋の土蔵の二階に籠つて、別れ別れの淋しい日を送つて居るのでした。

二人はしかし、生木<sup>なまき</sup>を割かれたまま、じつと運命に甘んじてゐるにしては若過ぎました。土蔵の二階に追い上げられて、しばらくの謹慎を強いられた染五郎が、まず思い出したのは、お絹が嫁入りする前の曾<sup>かつ</sup>ての日、ここから川を隔<sup>へだ</sup>

てて、新茅場町のお絹の家の裏二階と合図を交し合つた昔の記憶だつたのです。染五郎の家の小網町と、お絹の家の新茅場町とは、陸地を拾つて行く段になると、右へ廻つて思案橋または親爺橋、荒布橋、江戸橋、海賊橋と橋を四つ、左へ廻つて箱崎橋——一に崩れ橋——よろい港橋、靈岸橋と橋を三つ渡らなければなりませんが、真つすぐに鎧の渡しを渡れば眼と鼻の間で、丸屋の土蔵の二階窓から、お絹の里の福井屋の二階は、手に取るように見えるのでした。

染五郎はさつそく窓の格子こうしに手拭を出して見せました。千万無量の思慕を籠めた手拭が、ヒラヒラと夕風に翻ひるがえると、それを待ち構えたように、川を隔てた福井屋の二階欄干からは、赤い鹿の子絞りしごきの扱帶が下がるではありませんか。

「あ、お絹」

染五郎は思わず乗り出しました。欄干らんかんの赤い扱帶こそは、曾かつて恋仲だつた頃のお絹が、万事上首尾という意味を、川を隔てて染五郎に言い送る合図だつた

のです。この合図を受取つた昔の染五郎は、何を措いても鎧の渡しを越えてお絹に逢いに行きました。

「若旦那、お楽しみですね」

そう言う渡し守の猾<sup>ずる</sup>そうな顔を見ると、染五郎はツイ余計な酒代<sup>さかて</sup>をはずまなければならなかつたことなど——今はもう悲しい思い出になつてしまつたのです。土蔵の中に閉じ籠められている染五郎にしては、ここを脱け出して、川向うへ行く工夫はつきません。

こうして焦躁<sup>しようそう</sup>の幾日か過ぎました。父親六兵衛の怒<sup>いかり</sup>は容易に解けそうもなく、そのうちに丸屋の親類や仲人の出入りの激しくなる様子を見ると、いよいよ嫁のお絹を離別するつもりになつたことが、土蔵の中の染五郎にもよく判るのでした。あれほど染五郎が目をかけてやつた店中の者は、主人六兵衛の眼を怖れて一人も近づかず、三度の物を運んでくれる小僧の留吉だけは、何彼<sup>なにか</sup>と心配を

してくれますが、十三や十四の少年では、染五郎の憂悶を救う工夫もありません。

その中にたつた二人、染五郎とお絹の割かれた仲に同情してくれる者がありました。一人は石巻左陣いしまきさじんという浪人者で、丸屋の裏に年久しく住み、袋物の内職をさせて貰いながら、染五郎に道楽の指南をした中年男。もう一人はお半と言つて丸屋の掛り人かかうどですが、死んだ六兵衛の女房の姪めいで、取つて二十二になる小意氣な年増女です。

「若旦那」

「あ、お半か」

染五郎は不意に階下しもから声を掛けられて、窓格子にしがみ付いた顔を離しました。

「可哀想に、お絹さんが合図をしていますね」

「」

お半は何もかも知つていたのです。

「呼んでおあげなさいよ、若旦那。——これつ切り別れ話になると、お絹さんは生きちゃいませんよ」

お半はホロリとするのです。小意氣ではあるが、自分の醜さみにくさを意識して居るお半は、お絹と染五郎の仲を、犠牲ぎせい的な心持で同情してやつてはいるのでした。

「どうすれば宜いのだ、お半」

「鎧よろいの渡しは人目に立つが、大廻りに橋を渡つて来る分には、江戸の街に関所はありやしません。暗くなつたら此處へ来るよう、合図をして御覧なさいよ」

「合図」

「赤い扱帶しごきが『万事上首尾、忍んで來い』という合図じやありませんか」

「私が知らないと思つていらつしやるの、若旦那。——長いあいだ見せつけられたんでもの、どんな事でも見通しよ。ホ、ホ」

お半は少し蓮葉<sup>はすつば</sup>に言つて、笑いを噛み殺すのです。

「?」

「若旦那の方から行かれないんだから、こんどはお絹さんが通う番じやありますか。合図をして御覧なさいよ。——扱帯<sup>しごき</sup>は私のでも間に合わないことはないでしよう」

くるくると解いたお半の扱帯、同じ緋鹿<sup>ひか</sup>の子絞り<sup>こしば</sup>を、自分の手で土蔵の窓からサッと、外へ投げかけました。

川を隔てて、それを見たお絹は、どんな転倒した心持になつたことでしょう。このとき福井屋の二階のほのめく物の影は、欄干<sup>らんかん</sup>に乗出してジッと此方へ見入るのが、夕陽の中に白々と浮き上がるのです。

二

その翌る朝、丸屋六兵衛の死体は、店と土蔵の間、ろくな陽の当らない、ジメジメした路地の中に発見されました。

「わーツ、た、大変ツ」

張りあげたのは小僧の留吉です。

「なんだなんだ」

飛出した多勢の中には、番頭の宗助も、掛け人のお半も、下女のお角も、手代の竹松もありました。

傷は浴衣の後ろから一と突き、路地一パイに浸す血潮の中に、頑固一徹で鳴らした六兵衛は、石つころの様に冷たくなつてゐるのでした。

ゆかた

ひた

がんこ

てつ

そこに集まつた人数は、互に顔を見合わせるばかり、暫くはどうして宜いのか見当も付きません。

「旦那様」

番頭の宗助は、ともかく主人の死体を抱き起しましたが、そんな事をしたところで、呼び生けられるわけでもなく、ただ恐ろしい沈黙を破つて、自分の息づまる心持を紛らすだけのことです。

「なんだなんだ」

木戸の外から声を掛けたのは、庭下駄をつっかけて、房楊子をくわえた浪人者の石巻左陣でした。三十二三の總髪、袋物の内職もやれば下手な占いもやると言つた、器用貧乏の見本のような男、武芸も学問も大したものではない代り、口前と男前だけは相応です。

紅い扱帶

「あ、石巻さん、主人が——」

宗助は助け舟が欲しそうに乗出しました。

「これは大変。——だが、そんなに荒らしちや後が困る、無暗に足跡をつけないよう。——それから、外科と町役人に飛ぶんだ。若旦那はどうした、この騒ぎの中に見えないようだが」

さすがに浪人者の左陣は落着いてあります。

「蔵の二階ですよ」

お半は口惜くやしそうでした。

「そいつは一番先に出さなきや。——窮命きゅうめいも時によりけりだ」

こうなると石巻左陣が命令者でした。

一人は外科へ、一人は町役人へ、一人は土蔵の扉を開けて若旦那の染五郎を出すため、左陣は生湿なまじめりの路地に足跡をつけるのを嫌つて、大廻りに店口の方から入つてきました。

いんどう

まもなく飛んで来た外科は、一と眼に引導を渡してしまいました。傷は後ろから一と突きしたもの、多分声も立てずに死んだことでしょう。それと前後して、町役人といつしょに乗込んで来たのはガラツ八の八五郎でした。近所まで用事があつて、暑くなる前に片付けるつもりで来たのが、フト順風耳に入った丸屋六兵衛殺しを、手柄にするつもりもなく覗いたのです。

「おや、八五郎親分」

道楽者の石巻左陣は、こんな調子で迎えました。

「大変なことになりましたね、石巻さん」

「後ろからやられているんだから殺しには違いない。八五郎親分の良い手柄になるぜ」

左陣はそんな事を言いながら、いろいろの事を説明してくれました。

丸屋の六兵衛と伴染五郎の関係、嫁のお絹を里へ帰して染五郎は今朝まで現

に土蔵の二階に押込められていたこと、丸屋の主人は頑固で一徹者だが、商売熱心というだけで、人に怨を買うような人間でないこと。

「盗られた物はなかつたのかな、番頭さん」

「へエ、何んにも盗られた様子はございません。主人は金のことはまことに几帳面な方で、私の知らない出入りはない筈でございますから」

ガラツ八の問い合わせに對して、宗助はもみ手をしながらこう言つた。

「この木戸は開いていたのかな」

ガラツ八は路地から河岸つ縁に通ずる、粗末な木戸を指しました。

「開いていましたよ」

死骸を見付けた小僧の留吉です。

「多勢で踏み荒らしちや何んにもならないから、ここへは人を寄せ付けないようになつたんだが——」

そう言いながら左陣は湿しめった土の上を指しました。よく見ると、死骸のあつた場所から店の方はさんざん踏み荒らして、何が何やらわかりませんが、死骸から木戸まで三四間ほどの間は、左陣の注意でよく保存されたらしく、透すかして見ると、小刻みの足跡がはつきり読めるのです。

「ここはあまり人が通らないのか」

「滅多に通りません。暗くて陰氣で、何時でもジメジメして居りますから」

番頭の宗助は注ちゅうを入れました。足跡をよけて木戸の外へ出ると、河岸つ縁は初秋の陽が一パイに射して、カツとするような明るさ、鼻の先の鎧よろいの渡しを隔へだてて、向う河岸の家並が、人間の表情まで読めそうに見えたのでした。

「お、あれはどうした？」

ガラツ八は土蔵の二階窓を振り仰ぎました。そこからは赤い鹿の子絞りの扱帶しごきが、仕舞い忘れた洗濯物せんたくもののように、朝風にハタハタと動いているではあり

ませんか。

「へッ、気が付きましたかえ、親分。あいつは合図なんで」

小僧の留吉が応じます。

「合図？」

「若旦那が、新茅場町の福井屋に帰っている、御新造への合図を送ったんで。

へッ

# 紅い扱帶



©2017 萩 柚月

「お黙りッ」

お半は我慢<sup>がまん</sup>のなり兼ねた様子で留吉の耳を引っ張りました。

「痛いじやないか、お半さん」

「お前は本当におしゃべりだよ。子供はそんな事を言うもんじやない」

「チエツ」

「いや、言つてしまつた方が宜い。——その合図はどうしたんだ」

ガラツ八の八五郎はあわてて口を入れました。

「親分さん、小僧の言うことなどを真<sup>ま</sup>に受けないで下さい。そいつは何んでもありませんよ」

お半は必死の調子でその場を繕<sup>つく</sup>りますが、土蔵の窓に下がつた赤い扱帯<sup>しごき</sup>の秘密は、ガラツ八の注意をひしとつかんで容易にわき目を振ろうともしません。

「親分、大手柄ですよ」

その晩ガラツ八の八五郎は、鳴物入りで平次の家へ飛込みました。

「なんだ騒々しい、一番槍一番首と言つたような手柄かい」

銭形の平次は夕飯の膳を押しやつて胸いっぱいの涼風を<sup>きょうらく</sup>享樂<sup>きょうらく</sup>している姿です。  
「冷かしちゃいけません。——小網町の丸屋殺しの下手人を、たつた半日で擧げたのは大したことでしょう」

「なるほどそいつは手柄だが、——誰がいつたい下手人だつたんだ。詳<sup>くわ</sup>しく話

して見るが宜い」

「伴染五郎との仲を割かれた、嫁のお絹というのが下手人ですよ。この春祝言<sup>なわ</sup>したばかり、二十歳というにしては初々しくて、縄を掛けながらあつしもほろ

りとしましたがね」

「なるほどそいつは虐たらしいな」

「まるで白木屋お駒か、八百屋お七を縛るようでしたよ。骨細で、華奢で、子供子供した顔が真っ青で、泣きもどうもしないが大きな眼を見開いて——」

「そんな念いまでして、手柄を立てたいのかな、八」

「だって、外面如菩薩、内心如夜叉というんでしょう。あっしは目をつぶつて縛りましたよ」

「それほど動かない証拠があつたのか」

「証拠はあり過ぎる位で、——第一、染五郎と割かれて、うんと舅を怨んでいるでしよう」

「フーム」

紅い扱帶

「川の向うから合図をして、ゆうべ染五郎に逢いに来ている。——土蔵に閉じ

こめられた染五郎は、ノコノコ出かけるわけには行かないから女の方が通ったことは、小僧の留吉も、鎧の渡しの渡し守も知っていますよ」

「――

「木戸を開けて入つて、そこから出て行つたのは、足跡でわかりましたよ。足跡は小さい駒下駄で、お絹のものに間違はないし、木戸は外からでも開くことは、家の者だけが知つている」

「それから

「刃物は短刀で、川をさらわせると、わけもなく出て来ましたよ。こいつはお絹の嫁入道具の一つだ」

「その短刀は何処にあつたんだ」

「木戸のすぐ外、土蔵の下のところに投り込んでありましたよ。引潮になると見える位で、――尤も傷口に比べると少し細刃でしたが」

ひきしお

「お絹は渡し舟で来たのか」

「いえ、人に顔を見られるのが嫌だから、江戸橋を廻つて来たんだ相で、これは本人が言うんだから間違いはありません。鎧の渡し守は、仕舞い舟を出そうとして、客をあさるともなく眺めていると、丸屋の木戸へ若い女が入るのを見た相で」

「なるほど、証拠はそろつているな」

平次は何にか腑ふに落ちないものがある様子です。

「でしおう、親分」

「少し揃い過ぎて いるよ」

「?」

「木戸の中の足跡は小刻こきざみに付いていたと言つたな」

「へエ——」

「乱れては居なかつたのか」

「へエ」

「人を殺した若い女が、お能の橋がかりを引込むように逃げられるものかな」

「？」

「親爺橋、江戸橋、海賊橋と廻つて帰るなら、血の附いた短刀だつてわざわざ木戸の外へ捨てるに及ぶまいよ。傷口と短刀の合わないのも変だ」

「？」

「嫁の道具はまだ返していない筈だ。その荷物の中から、わざわざ自分の短刀を持出して、舅を殺すのはどういう量見だい」

「？」

こう平次に畳み込んで来られると、せつかくガラツ八の築き上げた疑いが、はなはだ怪しいものになります。

「証拠が揃い過ぎるよ、八

「

「他に怪しい奴はないのか

「ありませんよ。番頭の宗助は子飼いの忠義者だし、手代の竹松は宗助と枕を並べて寝ているし、あとは通いの職人ばかり」

「それから

「掛けうどり人のお半というのは無類のお人好しで、顔はまずいが氣立ての良い女だ。  
染五郎とお絹のことといふと夢中になる」

「そいつは幾つだ

「二十二三でしうね、嫁の口をあきら諦め切ったような年増ですよ。——でも小意  
氣なこまた小股ふの切上がつた、ちよいと踏めないことはありませんが

「それつ切りか

「あとは小僧の留吉と、店子の浪人石巻左陣と——」

「その敵役見たいな浪人は何んだい」

「丸屋の袋物の内職をさせて貰つて、ちよいちよい当らない占いもやります。  
三十二三の浪人者で、好い男ですよ」

「——」

「路地の足跡や、川の中の短刀は皆んなその浪人が見付けてくれました。見掛けによらない才智者で、うんと褒めてやると、——こいつは兵法の一つだから、何んでもないよ、なんて脂下やにさがつていきましたが」

「岡つ引も兵法の心得が要るようになつたのかな」

平次はそんな事を言いながら、何やら深々と考え込んでしまいました。

「親分、大変ツ」

翌る朝、ガラツ八の大変が鳴り込んで来ました。額際の汗を撫であげる様子は尋常ではありません。

まげぶし  
げんこ

「何が大変なんだ、相変らず御町内の子供衆を皆んな虫持にするぜ、少しほたしなめ」

「落着いていやいけませんよ、親分。三輪の万七親分が乗出して、小網町を小半日せせつて居ると思つたら、何に目星をつけたか、お半を縛つて行きまして」

「何？ 三輪の兄哥がお半を縛つた？」

「だからあわてもするじやありませんか、ね親分。何んとかして下さいよ  
お絹を縛るより確かだぜ、八」  
たし

「親分までそんな事を言つて居ちや、あつしは丸潰れだ。お半という女は、そりや醜い女に違ひないが、若旦那と嫁の間を一所懸命取持とうというほどの善人ですぜ」

「お前の鑑定が当てになるものか。とにかく行つて見るとしようか」

「有難てえ、そう来なくちや」

錢形平次はとうとう八五郎に引っ張り出されました。

「お前の面を丸潰れにするでもあるまいと思うから出かけるんだが、別に下手人の当てがあるわけじやないよ」

「でも、親分が乗出して下されば、何んとか眼鼻が付きますよ」

ガラツ八にしては、平次が顔を出しさえすれば、自分の不面目が救われるような気になつてゐるのでした。小網町の丸屋に行つて、現場の様子も見、染五郎以下の者にも会いました。が、ガラツ八が報告してくれた以外には、何んの

新しい発見もありません。

「土蔵の鍵は誰が持っていたんだ」

「店にありますから誰でも持出せます。若旦那を窮命させる心持さえ通ればよかつたんで」

番頭の宗助は実直らしい額を撫でるのです。

「その晩若旦那は誰と誰と逢つたんだ」

平次の問いは染五郎に向けられました。

「お半に二度、お絹に一度逢いました」

「お絹さんが来た時刻と、帰った時刻は?」

「戌刻（八時）過ぎに来て亥刻前に帰りました」

染五郎は昂然と応えるのです。天地神明に恥じないといつた態度です。一つ

はお絹を縛つたガラツ八に対する反感もあつたでしよう。

「その後では？」

「お半が来て床を敷いてくれました。それっ切りです」

「お半は主人を怨んでは居なかつたのかな」

「そんな事はありません。孤児みなしごになつて困つて居るのを引取つた位で——それ

に気の良い女ですから、この恩を返したいと言いつづけていました」

染五郎の言葉には、何んの陰影もなかつたのです。

それからもういちど番頭に会つて、帳面のことを訊くと、

「こんな事はない筈ですが、よく調べて見ると、旦那とうなのお手許に差上げた金の  
うちから、二三百両不足しております。金箱も用簞笥も錠前じょうまえが確りしておりま  
したから、泥棒ようだんすが入つた筈しつかもありません」

宗助は凡そ腑およに落ちない顔をするのでした。

宗助の後姿を見送つて、ガラツ八はそつと耳打ちをします。

「あの番頭が怪しいというのか。——そんな事はないよ。自分さえ黙つておれば、誰も気の付く筈のない金の不足のことを言うんだもの。日本一の正直者さ」外へ出て見ると、店と母屋おもやが土蔵に並んでギュウギュウに建つた上、その奥には長屋が二軒、一軒は石巻左陣の浪宅で、一軒は空いたまんまで。

「覗いて見ましようか、親分」

ガラツ八が誘うまま、平次も勝手口の方から枝折戸しおりどを押して、石巻左陣の浪宅の前に立つておりました。

「お、これはこれは錢形の親分」

左陣は内職の袋物を押しやつて、秋の陽ざしの中に顔を出しました。これで武芸学問の心掛けがあつたら、三百石にも踏めふそうな人柄です。

「何んの、邪魔どころか、私は飛んだ物好きで、捕物が面白くて面白くて仕様がないのさ。その後どうなつたえ、親分」

「一向眼鼻が付きません。いざれこの八五郎が縛つたお絹か、三輪の親分の縛つたお半か、どつちかが下手人でしよう。旦那のお考えはどうです」

「そいつは判らないね。——だが、お絹さんは下手人にしては綺麗過ぎるよ、ハツハツハツ。そんな事を言つたら、玄人くろうとに笑われるだろう。それに、自分の使つた短刀を、わざと見えるように土蔵の側の河の浅いところへ投り込む奴もあるまい」

「なるほどね」

平次は早くも見破つたことですが、左陣の話を聴くと、平次は今更らしく神妙に感心して見せるのでした。

「だが、お半も氣の良い女だ。恩人を殺す筈もないよう思うが——」

石巻左陣は内職の占いをする時のように、尤もらしく首を傾げるのです。

## 五

番屋へ行つて見ると、お半はすっかり潮垂れて、運命を待つ姿でした。その側で口書きを取つてるのは、得意満面の三輪の万七、お神樂の清吉。

「お、錢形の、御苦勞だね」

こういった調子です。

「三輪の兄哥、八の野郎が飛んだ縮尻しきじりをやつたそうで、面目次第もないが。」

「お半の方は白状したかえ」

平次はひどく下手に出ました。

「しぶとい女でね、判り切つたことをまだ白状しねえのさ。お絹の嫁入道具の

中から、短刀を持出せるのは、奉公人じやあるまいから、まずお半に決つたようなものだ。それに、あの晩おそくお絹が帰つてから、土蔵の中へ行つて染五郎に逢つたお半は、ひどくソワソワしていた相だよ。よく調べて見ると、その晩着ていた单衣にも、ほんの少しだが血が附いていたぜ」

三輪の万七は得意そうでした。

「なるほどそう聽けば疑いはないが、ちよいとその短刀を見せてくれ——鞘さやごと川の中に捨ててあつたんだね。——誰も拭きやしなかつたかい、これを

「拭くものか、汐水の滴たれるまんま持つて來たんだ」

「それにしちや血の跡もないぜ」

「拭いたんだろう」

「いや、鞘に入れて捨てる短刀を、わざわざ拭く筈はない。——拭いても脂位あぶらくらい

いない、いま磨いだばかりという刃の色だ。——それに傷にしちや短刀が細過ぎるね

「」

「お半。——お前は言い悪かろう。——人殺しよりもつと恥かしい事をしたんだから、——だが、それじや済むまいぜ」

平次は短刀を元の場所におくと、しづかにお半の方を振り返るのでした。

「」

「お前は主人殺しの罪を引受けて、磔柱はりつけばしらを背負うつもりだろう。が、そいつは

つまらない量見だ。お前のした事はよくない事だ。女としてはこの上もなく恥かしい事だが、命まで投げ出すことじやあるまい。どうだ、お半。俺は何もかも判ったような気がするが——」

平次は諄々として説くのでした。三輪の万七と八五郎のガラツ八は、ただ呆氣あつけじゅんじゅん

に取られるばかり。

「親分さん。私が悪うございました」

お半は堅い表情が崩れると、いきなりヒステリックに泣き出したのです。

「よいよい本当の下手人げしゅにんさえ挙げれば、三輪の親分もお前には用事はあるまい。

お前が言い悪いなら聴かない事にしよう」

「親分」

「八、お前は気の毒だが、石巻左陣さんを呼んで来てくれ。短刀を鑑定めききして頂  
きたいからって、宜いか」

「へエー」

平次の言葉の意味を測り兼ねた様子ですが、八五郎は何んにも言わずに飛出  
しました。その後ろ姿を見送つて、そつとつづく平次、物蔭に身を隠して、ガ  
ラッ八に誘い出されて行く石巻左陣の姿を見ると、入れちがいに、左陣の長屋

に滑り込みました。

第一番に上がりかまち、下駄箱、落しと手早く覗いて、女下駄の古いのを見付けると、その底に付いた新しい土を爪で触つて見て、それからたつた二た間しかない家の中を、疾風しつふうの如く調べあげました。

「無い」

暫らくすると、平次はがっかりして外へ飛出しました。狭せまい家の中は天井裏から床下まで調べあげましたが、捜すものが見付からない先に主人の石巻左陣が帰つて來たのです。それを見ると、

「これはなんだ」

石巻左陣はサッと顔色を変えました。

「氣の毒だが、少し見せて貰いましたよ」

平次はニヤニヤして居ります。

「これでも二本差しだぞ、留守中に入つて済むと思うか」

左陣は叱咤しつたします。その後ろから心配そうに覗くのはガラツ八の顔です。

「こんなものを見付けましたよ、石巻さん」

「その下駄がどうした」

「丸屋の木戸の中にあつた足跡にピタリと合いますよ」

「女子供の下駄はたいてい同じようなものだ、それが何うした。——尾羽打枯おはうちか  
らして居るがこれでも武士の端くれだぞ。何んのために人の家へ入つた。まず  
それを言えツ」

石巻左陣は日頃の穏和さを失つて、怒氣を含んだ顔が紫にさえ見えるのでし  
た。

「血染の脇差と、——もう一と品。——金の包みを搜さがしましたよ

「そんな物はあるまい」

左陣はニヤリとしました。が、その眼はしかし妙な方角へ——。

「判つた、八。その下水の中を見ろ、石を起すんだ。俺はこの野郎と一汗搔く

「何を無礼」

「御用だぞッ」

平次はパツと石巻左陣に飛びかかったのです。

この捕物は、平次にしては思いのほか楽でした。奸智にだけ長けて、武芸の心得の怪しい石巻左陣を取つて押えると、ちょうど八五郎は、下水の蓋になつてゐる御影石を起して、その下から三百両の金包と、碧血斑々たる脇差を搜し出したのでした。

「親分、この通りだ」

「八、お前の顔も立つたぞ」

「有難てえ」

×

×

お絹もお半も許され、お絹はまもなく丸屋に戻つて、染五郎と睦まじく暮しました。

石巻左陣は丸屋六兵衛殺しの罪状が明かになつて、死罪になつたことは言うまでもありません。その罪状というのは、丸屋六兵衛に後添を世話すると持込み、その仕度金を三百両受取つて、急に金が欲しくなり、世間体をばかる丸屋六兵衛をあざむき、夜陰におびき出して刺し殺したのです。その頃丸屋の嫁が里に帰され、染五郎と逢引の合図を交かわしていいるのを見て、悪賢い左陣は、女下駄で足跡までこしらえて罪をお絹に転嫁しましたが、川に捨ててあつたお絹の守り刀については、不思議なことに何んにも知らなかつたのです。

「不思議じやありませんか。ね、親分。あの川の中から見付けた、お絹の短刀はどうしたことでしょう

一件落着してから、ガラツ八が最後の疑いを平次に持出すのも無理のないこ  
とでした。

「あれは俺にも判らなかつたよ。しかし、お絹の荷物の中から短刀を盗み出せ  
るのは、お半の外にはないことを考えると、すぐ判つたんだ」

「へーエ？」

「お半は根が悪い女じやあるまい。自分が見つともないのを百も承知で、染五  
郎とお絹の間を取り持ち、二人を一緒にしてやつた位だもの。でも、やはり女だ。

子供の時からいっしょに育つた染五郎をお絹に取られて、口惜しいと思う心持  
は何処かにあつたんだろう。その嫉妬を恥かしいことだとは百も承知している  
か、二人の仲があんまり睦<sup>むつま</sup>じいのを見ると、ついムラムラツとしたのだろう  
「へエ——つまらねえ女ですね」

ガラツ八にはその微妙な心持がわかりません。

「あの晩路地の中で主人の六兵衛が殺されているのを見ると、これがお絹のせいだつたら、自分のところへ染五郎が転げ込まないものもあるまいと思つたのさ。お絹の短刀を持出して、一度は死骸の側に捨てるつもりだつたが、それもあんまり気がとがめるので、路地の中から木戸を越して川へ投り込んでしまつた」

「それは本当ですかえ」

「お半に聴いたわけではないが、多分その通りだらうと思う。——だから、下手人の疑いは晴れたが、お半はその日のうちに房州の遠い親類のところへ行つてしまつた。二度と丸屋へ帰つて、夫婦の睦じいところを見る氣はあるまい」

「へエー。怖い女ですね」

「あんなことさえしなきや、一生善人で通る女さ。フトした心の迷いだ。あんまりほじくり出すのも可哀想だから、俺は知らん顔をして逃がしてしまつたよ。

尤もこの殺しは最初から女の細腕ではあるまいと思つたよ。あんな建込んだ中で、たつた一と突きで人を殺せるのは、何んといつても大した手際だ』相變らず平次は、そう言つた男だつたのです。が、ガラツ八に取つては、この醜い女お半は、妙に忘られない人間の一人でした。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られます  
が、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でも  
あり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承  
のほどをお願い申し上げます。

挿絵——萩 柚月

初出——「オール讀物」昭和十七年九月号 文藝春秋社

底本——「錢形平次捕物全集」第七卷 河出書房 昭和三十一年八月五日初版

紅い扱帶

編集・発行

錢形俱楽部



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>